

# 第6回高校生カンボジアスタディツアー

広島大学附属高等学校 Mana K.

皆さん、こんにちは。私はこの夏 7 月 30 日から 8 月 6 日にかけて日本ユネスコ協会主催の第 6 回高校生カンボジアスタディツアーに参加させて頂きました。このニュースレターでは、スタディツアーで得たたくさんの貴重な学びを、カンボジアの内戦と教育の 2 つの視点から皆さんと共有させて頂きたいと思います。是非ご覧下さい！

## ～内戦～

1975 年から 1979 年の間、カンボジアでは**ポル・ポト**という独裁者がカンボジアを支配していました。ポル・ポトは、**クメール・ルージュ**という政党の政治的指導者として「知識人は共産主義の邪魔になる」という**極端な共産主義思想**のもと、都市の住民らを農村に強制移住させ、強制労働や拷問、虐殺を繰り返しました。

### ① ツールスレン博物館

ポル・ポト政権までは元々学校であり、クメール人（カンボジアの人々）にとって宝物であったこの建物は、ポル・ポト政権下の 3 年 8 か月間、刑務所と化しました。たった 5 年間の間におよそ 2 万人もの人々が収容され、そのうち画家や大工の 12 人のみを除く全ての人が無差別に虐殺されました。収容された人々は鉄の台の上に足首を金具で固定され、トイレさえ行くことが許されませんでした。収容された人々の写真の中の表情からは、悲痛な訴えのようなものを感じました。



しかし現在のカンボジアではこのような過去はあまりひどいことは扱われません。学校でもポル・ポト政権のことは教えられず、クメール人たちは本当のことを両親や本、経験者から教わるそうです。またクメール人は助けを求める幽霊がいるように感じるため、この博物館にはあまり足を運ばないそうです。被爆地ヒロシマに住む者としても、過去の負の出来事は二度と繰り返さないように皆で学ばなければならない、とばかり考えていた私でしたが、クメール人のようにそれを行うことに抵抗のある人、またその環境が整っていない現状に置かれている人もいるのだと知り、改めて世界には様々な立場の人がいるのだと気付かされました。

### ② キリングフィールド

ここにトラックで運ばれてきた知識人や外国人、特にベトナム人・中国人が無差別に殺されました。その虐殺方法は無残なもので、未熟なヤシの木のギザギザした部分をノコギリのようにして首を切ったそうです。その後は死体の臭いがしないように薬がかけられました。尊い命がいかに大切にされていなかったのか。そう感じたと同時に今の私たちがどれほど恵まれた環境にあるのかを実感しました。命を大切に扱われ、基本的な人権も尊重されています。昨今では女性の権利なども主張されていますが、自分の権利を主張できること自体も恵まれた環境にあるからこそできることなのではないかと思いました。しかしそのように考えていた私は、現地のガイドさんが

漏らした一言に衝撃を隠し切れませんでした。それは「私は今の時代に生まれて、幸せだとは思いません」というものでした。これまで広島で被爆者の体験談を伺っていた中でも、「今の時代を生きる者として、今の時代に感謝しながら生きたい」「生き延びた人として、使命を感じる」などの発言はよく耳にしました。だからこそガイドさんの一言から、今を生きる私たちはどうあるべきなのか、と考えさせられました。

ここには現在 3000 から 5000 の骨が保管され、虐殺された人々が来ていた服が展示されています。ツールズレンからトラックに運ばれてきた人々は「自分の命は明日はもう無い」と感じていました。広島の場合には跡形もないというケースが多いですが、犠牲者のお骨を目の当たりにするカンボジアの負の遺産も別の視点で過去の過ちを見つめることが出来ました。



## ～教育～

ポル・ポト政権で多くの知識人が虐殺されたことで、現在カンボジアでは**教師の不足**が深刻な問題となっています。しかしながら教師の給料は低く、他の職業も行う教師が多くなります。そのため教師が授業準備に充てる時間が低くなってしまい、**教育の質の低下**の原因となっています。また家庭の貧困などが理由で学校を**ドロップアウト**してしまう子供も多くなります。そこで学校を辞めざるを得なかった子供たちにもう一度学びのチャンスを提供しているのがユネスコの**世界寺子屋運動**です。

### ① UNESCO プノンペン事務所

カンボジアの教育と文化に関するユネスコの事業について、それぞれ S 様と M 様からお話を頂きました。その中でも、「遺産というのはそれぞれの国の**アイデンティティー**であり、国をまとめるために必要なもの」というお言葉がとても印象的でした。その一方で、十分な教育を受けることの出来ず、アンコール・ワットやアンコール・トムという自分たちの国の世界遺産について知らないクメール人が多くいるそうです。またその価値を知らないがゆえに、アンコール・ワットやアンコール・トムを壊し、その石を持って帰る人もいます。これはつまり、自分たちの国の良さやアイデンティティーを知らず、さらにそれらを自ら奪っているということです。教育が与える影響は、決して識字率などの目に見える数値にとどまらないことを実感しました。



## ② 日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所

こちらではブッタ所長から、カンボジアの寺子屋についての講義を聞かせて頂きました。カンボジアの**非識字率は減少傾向**にあり、46%だった1998年に比べ、2019年現在では16%にまで減少しているそうです。また就学率も90%にまで上昇しました。しかし、国際機関・NGO・政府機関からの**ノンフォーマル教育へのサポートは限定的**です。ブッタ所長も「寺子屋を**良いモデル**として政府に教育を**自主的に**進めて欲しい」とおっしゃっていました。

この時、寺子屋はあくまで教育におけるカンボジアの自立のためのきっかけに過ぎず、寺子屋の普及によって全ての子供たちに学びの場が提供されるというのが最終目標ではないのだと気付きました。**コミュニティーの人**が自分たちの問題だという自覚を持って教育と向き合うことが必要なのです。そのためにも、日本ユネスコ協会連盟はコミュニティーの人々の運営による生涯教育を促しているそうです。



## ③ チョクニア寺子屋

水上に校舎を構えるこの寺子屋で、この寺子屋の実態について教えて頂きました。その中で私が印象的だったのは寺子屋で学んだ多くの生徒が**自立**しているということです。寺子屋での学びが人生を支えているのだと改めて感じました。例えば、カンボジアのホテアオイという伝統工芸を寺子屋で学んだ生徒が、今はホテアオイの先生になり、商品は海外に輸出されているそうです。こうして得たお金で寺子屋の運営が支えられています。教育によって、カンボジアのコミュニティーの人によるサイクルが成り立っているのだと知りました。



お話の後には、寺子屋に通う子供たちに教えてもらいながら実際にホテアオイのコースターを作りました。言葉が通じず、初めての作業に苦戦する中でも、子供たちは優しく丁寧に作り方を教えてくれました。子供たちが勉強をし、ホテアオイを学んだこの寺子屋で、私は優しさや人と人との触れ合いについて学ぶことが出来ました。



#### ④ リエンダイ寺子屋

実際にカンボジアの寺子屋を訪問させて頂きました。まずは子供たちの授業と一緒に受けさせて頂きました。

授業の形式はとても日本のものに似ており、先生に指名された子供がその場に立っては発言したり、前に出てホワイトボードに自分の答えを書く場面が多く見られました。

ただ日本の学校とは異なる点も多くありました。1 つは教室に電気がなく、太陽の光に頼っているということです。カンボジアでは都会には電気が通っているものの、田舎には通っていません。しかし、カンボジアの子供たちは日本人のようにスマートフォンを使わないので、目が悪くなるということは無いそうです。電気を日本では勉強する時には必ず電気をつけます。しかしそのカンボジアの寺子屋の様子から、自然の力を利用し、身の周りのものに感謝する姿勢など、クメール語が分からないながらも寺子屋で多くの学びを手に入れることが出来ました。もう1 つは、子供たちの座席の座り方です。座席指定はないにも関わらず、男の子が左半分、女の子が右半分に座り、男女が完全に分かれて座っていました。これはカンボジアの男の子が女の子に対して恥ずかしいと感じるからだそうです。学びの場で見られた文化の違いは印象的でした。



#### ⑤ 家庭訪問

寺子屋に通う生徒の家庭を訪問させて頂きました。私が訪問させて頂いたのは 15 歳の Y さんという女の子の家庭でした。両親は彼女がまだ幼い頃に別れ、現在母親はタイに働きに行っており、父親は行方不明だそうです。そのため、Y さんは祖母と一緒に暮ら

しています。弟は遠く離れた田舎でもう一人の祖母に育てられているそうです。

家は木の枝にトタン屋根を付けたのみで、天井はすぐに頭をぶつけてしまうほど低いものでした。隣にはコンクリート製の柱がありました。これは、家の建て替えを行っていた途中で借金が重なり、工事を中断した残骸でした。ベッドはカバーや布団のない木の台。そして15歳にしては小さく痩せ細った彼女の体。いくら物価が安いカンボジアとはいえ、1カ月の収入がたったの50ドルというのが、どれだけ差し迫った状況なのかが分かりました。

Yさんは寺子屋に現在の寺子屋に通うまでは国立学校に通い、成績優秀でした。彼女の学ぶことへの意欲は他の場面でも感じられました。彼女は数学が好きで、数学をしている時が一番幸せだそうです。また、彼女に一番欲しいものを尋ねると彼女は「卒業まで勉強すること」と答えました。それほど学びに対して熱心な彼女ですが、本当はよく寺子屋を辞めようと思うそうです。それは彼女が寺子屋を辞め、その代わりに働いて収入を得ることで、彼女の弟が学校に通えるようになるからだそうです。一人の子供が学校に通うために、学びたいと強く思う一人の子供が犠牲にならざるを得ないのです。「自分は幸せでないから、弟には幸せになって欲しい」と話してくれました。家族を想うことの大切さを再認識したと同時に、カンボジアでいかに教育の場が不足しているのかを実感しました。日本で伝えて欲しいと彼女から託されたことがあります。それは「田舎ではまだまだ寺子屋が足りない」という内容でした。このメッセージを一人でも多くの人と共有していきたいと強く決意しました。



## ⑥ 塗り絵プロジェクト

寺子屋に通う生徒たちと世界遺産について学ぶため、世界遺産アンコール・トムにて塗り絵プロジェクトを行いました。子供たちの中には、これまでに十分な教育を受けることが出来なかったために、アンコール・トムやアンコール・ワットについて知らない、または足を運んだことが無いという人もいました。このことはUNESCO プノンペン事務所でのお話に繋がる点がありました。しかし子供たちの学ぶ意欲から、問題の原因は子供たち自身に存在するのではなく、教育の場の不足にあるのだと実感したと同時に、子供たちの熱心な学びへの姿勢に応えきれない教育の現状を残念に思いました。カンボジア、そして世界のより良い未来のためには、全ての子供たちへの平等な教育の提供が欠かせないと感じました。



これからは、様々な人との出会いを通して得たこれらの貴重な学びを、より良い世界のために活かしていきたいと思います。そのためにはまず、これらの学びをより多くの人と共有していきたいです。今皆さんがこのニュースレターを読んで下さるというのも、共有の一つです。この積み重ねこそが、世界を変える大きな一歩になると信じています。最後までご覧頂き、ありがとうございました。

最後にはなりましたが、このような素晴らしい学びの場を提供して下さいました日本ユネスコ協会連盟様をはじめとする全ての方々、そしてその学びを共有して下さいました全ての方々に心より感謝致します。